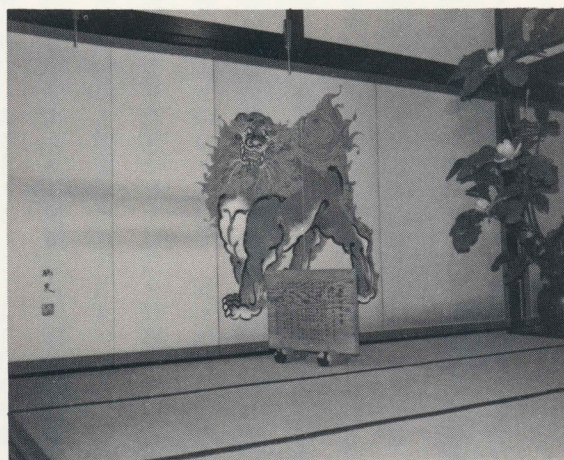


# 第四章 曳山祭の盛況



山宿を飾る屏風



## 一、曳山祭の改革

### 新しい行政組織

慶応四年（一八六八）六月、今石動町奉行所が廃止され、城端も砺波・射水郡奉行の支配下におかれることになった。また九月には明治と改元された。明治二年（一八六九）には郡奉行所も廃止され、砺波郡治局が設置された。また一四代藩主前田慶寧は版籍奉還して金沢藩の知藩事となったが、領域の変更はないので、庶民にとってはいっそうに御一新ではなかった。しかしこの年、新川郡では「ばんどり騒動」が起きている。

明治四年（一八七一）四月に戸籍法が制定された。七月には廃藩置県が断行されて金沢藩も金沢県となったが、一月から砺波郡は婦負郡・新川郡とともに新川県に属した。

これまで加賀藩への年貢米は、山田川河畔の御蔵へ収めることになっており、現在の西新田神明社の付近に朱塗りの立派な御蔵が四棟一〇戸前あった。今石動町奉行所より代官が来てこれを管理し、米の収納役は在町の塩野田屋（永井家）が務め、山田川から小矢部川へと川舟で米を運搬したものであった。

また池川の河畔には紺屋蔵と称して、土分の米を預かる倉庫があった。紺屋は荒木家のことで、川崎屋（宮永家）とともに倉庫業を営業し、川舟が今の丸絹機業場のあたりまで上っていた。東下町の東側一帯の石垣は、絹問屋や酒造・倉庫業を営んだ池田屋が冬季の失業対策のために行った仕事である。

明治五年（一八七二）一月、砺波郡の行政組織がかわり、これまでの一六の十村組を廃して一一の区に分け

郡内に六つの区会所を設けた。城端は第一区に属し、区には区長・副区長・租税調役・租税方書算役<sup>しざんざん</sup>と五人の戸長が選ばれ、城端からは副区長に松本才喜、戸長に伊藤市曹・林庄平らが任ぜられている。六月に区画が改められ、新川県は一大区、九五小区に分けられた。さらに九月には七尾県が廃されて射水郡が新川県に属するようになり、一月からは県下を二七大区、一三二小区に分けた。その後、明治七年（一八七四）二月に、二五大区、一二二小区に区画改正があり、城端地方は第二五大区に入り、区会所が城端に設けられた。

明治九年（一八七六）四月、新川県が廃止され石川県に併合された。そして砺波全域は第五大区となり、区務所は石動町に設けられた。この大区組織は、後の郡の区域に相当する規模であった。九月には大区に正副区長、一四の小区に戸長、町村に副戸長がおかれ、城端は小四区に属し、一月に谷口豊平が副戸長に任ぜられている。

明治十一年（一八七八）七月に郡区町村編成法・府県会規則が制定され、区務所が廃されて郡役所となった。また翌一二年（一八七九）四月、最初の県会議員選挙が行われた。この年一月に実施された町村区画の改正により、戸長役場の制度ができて、砺波郡には六八の戸長役場がおかれている。また十一月には町村の議会議員の選挙が行われた。

明治十六年（一八八三）、越中一円が石川県から分離して、富山県が成立した。また翌一七年（一八八四）七月の町村区画の改正で、公選戸長が官選に改められ、戸長の所管区域も変更され、砺波郡に四九の戸長役場がおかれることになった。



# 明治初期の絹織物業

明治初期の城端絹は、通称を「<sup>すだま</sup>節絹」といい、幅は九寸、一疋の長さは六丈五尺、五〇匁前後の目方の製品で、「小川絹」ともよんだ。小川絹の名称は、藩政後期に武州（埼玉県）小川からその技術が伝えられたからだという。

機具は「<sup>はた</sup>チンカラ機」とよばれる斜め立機具の手機で、生産工程は<sup>たて</sup>経糸が繰返し・整経・<sup>はき</sup>箆通し・巻返し・<sup>かけ</sup>掛杆掛け・機掛け、<sup>とこ</sup>緯糸は繰返し・管巻き（太鼓巻きによる）となり、一機（三疋）を一〇日で織るのが普通であり、年間三二機以上の製織が可能であった。当時城端の戸数は一〇〇軒といわれたが、ほとんどの家で一台または二、三台、多くて五台の機具を据えて家内生産していた。中には近村の娘を一、二人住込ませる機屋もあり、農閑期には出機もしたが、主に家族労働が中心の家内工業であった。

節絹は経糸が五箇山産の<sup>たな</sup>単繰、緯糸が福光産の玉繭糸で、大部分は仲人の手によって織屋へ運ばれ、時には五箇山から直接購入することもあった。製品も仲人に委託して絹問屋へ販売した。絹問屋は三、四軒あって、布崎新石衛門（布市屋）、池田勘造（池田屋）、野村理兵衛（荒山屋）、岩倉文右衛門（高瀬屋）などがあり、その後笹井作兵衛（梨谷屋）、石崎新兵衛（浜屋）、田中嘉左衛門（野尻屋）なども営業した。また仲人は、一時期七、一〇人内外の者が従事し、織屋より委託された製品を絹問屋の店へ持ち込み、商談によって販売した。代金は、一、一、一二日、二、一、二二日、三、〇日と月三回に精算していた。問屋からは毎月一、二回、京都へ仲使いする駄馬によって搬出された。従って絹問屋と生産者（織屋）との直接取引はなく、すべて専属の仲人を立ちとする仕組みであった。

城端と五箇山との取引関係は、藩政時代以来、貸方を通じて城端から米をはじめとする生活物資を供給し、五箇山からは紙・苧・生糸などの産物を独占的に集荷するものであったが、貸方は幕末頃から判方（飯方）と称され、五箇山口の東新田町をはじめ全町で一〇数軒が営業し、大口貸付をする御坊町の大岡小兵衛（大鋸屋）・西新田町の岡部長左衛門（樋瀬戸屋）は「長者判方」といわれた。

五箇山への米・塩、城端への生糸・紙・苧などの運搬は「ボツカ」と称する荷担ぎ者によって行われた。また、梨谷から石灰の原石を運ぶ仕事盛んで、これにたずさわる者の数は、当時の人口の二割五分ぐらいもあったという。

幕末の開港以来、生糸の輸出が盛んになり、福光の製糸業の繁栄に刺激されて、城端でも五箇山の繭を原料として明治一〇年（一八七七）頃から製糸業が始まった。まず矢部甚助が東新田町で二〇数人の工女を入れて操業し、一時は四工場ほども設立された。轆轤仕掛けのハンドルを廻すと繰取り棒がいつせいに回転する最新の機械が使用され、糸ひき唄の声も流れた。原料は五箇山をはじめ岐阜県などからも移入し、生糸は金沢の問屋の手をへて横浜の商館へ引取られ輸出されたが、その後各地の大量生産に圧倒されて経営難におちいり、数年で操業を中止した。

## 城端の文明開化

城端町の郵便取扱所は、明治五年（一八七二）七月伊藤市曹を初代として宗林寺町に創設されたが、明治六年（一八七三）八月東下町に移り、篠井万三郎が二代目郵便御用取扱役となった。郵便局と称するようになった



たのは明治八年（一八七五）からである。

警察制度は、明治三年（一八七〇）頃から巡邏がおかれて発足したが、明治四年（一八七一）に邏卒と改められた。明治七年（一八七四）に制度が変わり、県内一二カ所に屯所がおかれた。城端の屯所には七名の巡視が配置され、当初は東上町、次いで西上町に屯所が移った。明治一〇年（一八七七）九月に石動警察署城端分署と改称され、一四年（一八八一）東上町、一七年（一八八四）に東下町へと、転々と庁舎を移した。

明治五年（一八七二）八月に学制が發布され、城端では明治六年（一八七三）四月から善徳寺内に小学校を設けたが、明治七年（一八七四）からは城国寺に移り、済美小学校と改称した。

明治七年（一八七四）野下町に小学校が建設されることになり、各町内では毎晩石引き作業に出て奉仕した。古い曳山の地山に行燈を立て、各町が木遣歌をうたって作業した。明治八年（一八七五）末に校舎が落成し、翌年一月に移転した。

その後、明治一九年（一八八六）に小学校令が出され、従来の最小年限三カ年から尋常科四カ年に義務教育が延長されたので、さらに新校舎を建設し、翌年四月に高等尋常小学校を開いたが、高等科は一年間で廃止した。

城端の生んだ偉大な学究家笠原研寿は、明治九年（一八七六）東本願寺法主現如の命により、南条文雄とともにイギリスに留学し、オックスフォード大学教授ミューラーについて梵語を学び、仏典の研究にあたったが、肺病を患い、明治一五年（一八八二）に帰朝、翌一六年（一八八三）七月一六日、三三才で死去した。大正一〇年善徳寺台所門前に、その顕彰碑が建てられ南条文雄が碑文を撰している。

明治十一年（一八七八）明治天皇の北陸巡幸の時に、一代小原治五右衛門得賀は金沢博物館へ蒔絵の作品を出陳し、買上げられた。現在「花鳥文料紙箱」が東京国立博物館に保管されている。

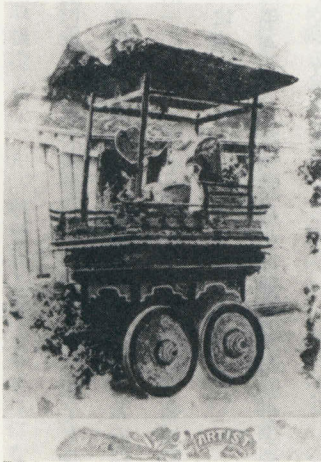
善徳寺では、明治六年に第一七世速悟院巖高が若くして病死したので、その後第一八世住職として宝香院勝道が就任している。善徳寺は明治九年（一八七六）一〇月に城端別院と改称されたが、一七年（一八八四）五月には宗別寺法の改正により別格別院と定められた。

明治初年のいろいろな変革は、城端町民の生活と習慣を大きく変化させたが、その中でも太陽暦の採用、それにともなう曳山祭の改革は、町民の心に新時代の到来を強烈に印象づけた。

### 曳山祭の改革

明治維新によって近代的な諸改革が断行された反面、王政復古の名が示すように、復古的な諸政策も施行された。祭政一致の古制にかえり、国家神道が成立するのもその例である。

慶応四年（一八六八）三月、神仏分離令が発せられ、修験道山伏も還俗し、寺号を廃して神職となった。明治十三年（一八八〇）の「社寺明細帳」によると、神明社祠掌は教導職試補の篠原伊左美、兼務祠掌は訓導の利波直枝、氏子総代は野村理兵衛、氏子戸数は六二四戸となっている。



唐子山の古い姿

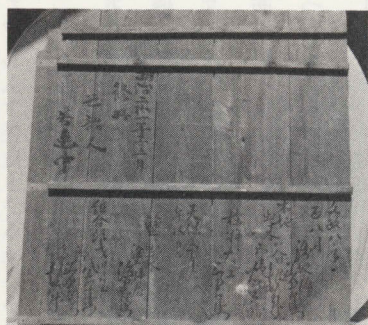


城端神神社は天明五年（一七八五）の「村鑑帳」にも「惣社」と記され、重んぜられていたが、明治二年（一八六九）に「村社」に列し、明治五年（一八七二）には「郷社」に列するとの内命を受けたが、氏子町民は経費負担の事情でこれを辞退した。

明治元年（一八六八）は前年に孝明天皇崩御のため諒闇（天皇の喪に服すること）でひき山はなく、翌二年（一八六九）は凶作、三年（一八七〇）も飢饉で曳山は出さず、飾り山であった。しかし庵屋台は明治三年に出している。

明治四年（一八七一）は、『御旅所へお姫様お成りにつき、御巡幸・曳山は一八日まで延ばす。』と記録されている。八月一八日は雨が降り出し、西上町で泊り山となり、一九日西上町から荒町をくだり、横町から東町へむかい、宗林寺町を上って新町で提灯をつけ、庵屋台は御坊の前まで巡回した。

「お姫様」というのは、明治維新に際して加賀藩が、加賀・越中の大寺へ前田家の息女方を預けたことがあり、善徳寺へは冷<sup>あひづ</sup>姫様が来ておられたもので、善徳寺第一七世速悟院巖高と縁組の話もあった。明治六年に巖高が病死したのでその後東京へ引上げられ、公爵二条基弘に嫁がれたということである。



東上町屋台の箱書



諫鼓山の上壇彫刻  
石橋の彫りものと収蔵箱の蓋

明治五年（一八七二）、東上町では曳山の上段の腰の彫物に漆塗りと塗箔を行い、出丸町では庵屋台を修繕している。

この年は太陽暦が採用され、明治五年二月三日を明治六年一月一日とすることになった。今まで春祭が三月一日、秋祭が八月一日で、秋祭に曳山を出してきたが、この暦制改革を機会に春祭を五月に、秋祭を九月に改め、春祭に曳山を出すことになった。

いままで曳山巡行の順番は、西下町・西上町・東下町・出丸町・大工町・東上町の順で一定しており、東上町はいつも殿であつた。東上町ではこれを不満として、いくどか順番変更を提議したが受け入れられなかった。そこで明治六年（一八七三）、東上町は、御一新で万事が改正になるのだから曳山の順番も、往古からの傘鉾順に改めるべきであると申し出た。当時戸長であつた東新田町の林庄平の斡旋によって、山町の代表が会所に集まり、協議した結果、颯で順番をきめることになった。四月一日、神明社へ集まり、神前で颯取りを行い、第一番西下町、第二番東上町、第三番大工町、第四番西上町、第五番東下町第六番出丸町と決定し、翌年よりは第六番が第一番となり、第一、第二は、第二、第三というように一番ずつ下がることを約束した。

その当時、恵比須・大黒・布袋のいだという言葉が流行したが、これまで五番・六番であつた大工町・東上町が、東上町が二番、大工町が三番となり、西上町・東下町・出丸町を抜いたという意味であつた。



第六番となった出丸町では、これを憤慨して大騒ぎになった。ついに各町とは別に祭を行うことを決議し、四月一五日に単独で祭礼を行い、社参もすませてしまった。そのため他の町は、五月一日に出丸町を除いて祭礼を行うことになった。出丸町代表者の連絡不足のために起きたことで、後で来年は一番山になることが判り、出丸町はまた各町と一緒に祭をする申し入れた。しかし各町は出丸町の祭礼はすんでいるといつて容易に承知しなかった。何度も交渉が行われ、出丸町を詫びさせて、結局一諸に祭をすることになった。

曳山を出す春祭が五月一五日に確定したのは、その翌年からである。曳山の順番を毎年替えるようになって、東上町などの不満も解消し、曳山祭に新しい息吹きが注入されることになった。

東上町では、明治六年（一八七三）に寿老人の装束を新調、明治八年（一八七五）に従来の小型内車様式を大八仕立ての外車様式に改造、明治二〇年（一八八七）には地山の幕も新調した。西下町でも明治一二年（一八七九）、曳山の堆黒彫刻を新調し、曳山の腰廻りを大改修して大型に改造した。西上町でも明治一八年（一八八五）に恵比須の装束を新調した。

曳山・庵屋台の巡行にも新しい方式が採用された。出丸町へ各町の曳山が入りこんで昼食となるが、その時に庵屋台だけは川原町へおろすことになった。昼食がすんで、第一番の庵屋台が出丸町へ上がると、これに続



諫鼓山の上壇彫刻

謡曲「石橋」より取材、牡丹に唐獅子の彫りもの。  
大正6年大島五作造。

## 二 庵屋台の整備

いて一番山が動き出す。第二番の庵屋台がこれに続き、その後に二番山が動き出す。このようにして各町の曳山と庵屋台は、出丸町を立ち去ることになった。今町と中野下町<sup>なかのげ</sup>への順路を定めたのも、この明治八年（一八七五）からのことであった。

安永の曳山訴論事件以来、厳しく制限されていた大八車様式の禁も無効となり、新しい時代の曳山祭が開始されたのである。また、道路・町川の改修工事が行われて道幅が拡張され、曳山の大形化が可能となった。庵屋台の修復や庵唄の充実も、新時代に即応した曳山祭の改革であった。

## 二、庵屋台の整備

### 町制の施行と明治の大火

明治二十一年（一八八八）四月、市制・町村制が公布され、翌二十二年（一八八九）四月より施行された。城端町では五月八日に第一回町会議員選挙が行われ、定員は一級六名、二級六名の一二名であった。この新しい町会によって、五月二十四日、町長に栗山半蔵、助役に大道加門、有給助役に上田義男が当選している。これまでの戸長役場が町役場とかわり、現在の城端保育所の地に建設された。また、町を従来の一〇カ町と川島・川原・大宮野・新泉沢を併せた地区の一一区に分け、議員の投票選挙によって、一一名の区長が選任された。この年



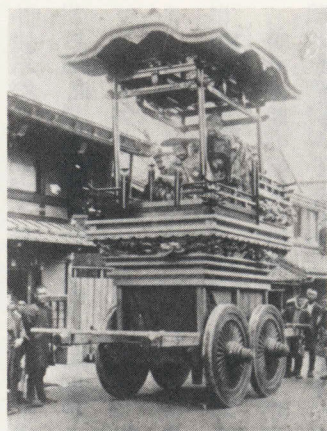
鶴舞山の車輪

明治40年(1907)の作。雲に鶴の金具が空地のない  
まで打たれ、輻(矢)には肘木が付いている。



した。吏党は金沢の盈進社の壮士や石動・高岡などの暴徒をつのって各地へむかわせた。城端では別院が投票所となっていたが、金戸の中川甚兵衛は御坊坂で壮士に襲われ、白刃を振りかざしておどされたので、大岡小兵衛方へ逃げこんで難をのがれたと伝えられる。

明治二十七年（一八九四）に日清戦争が始まった。この年五月、富山県は消防組設置区域とその人員を定めたが、城端では組頭一人、小頭三人、消防手四六人、計五〇名の公設消防組が設立され、初代組頭に岡部長左衛門（一八六七―一九二四）が就任した。城端の消防組織は、当初町内ごとに四〇人を一組としたもの一〇組、木製ポンプの龍吐水一〇台であった。まだ明治以前には「三十人組」と称する組織もあった。明治二十三年（一八九〇）からは八〇名の消防夫をもって再編成し、新たに金属製の腕力ポンプ二台を備え付けた。さらに二十四年（一八九一）、規則を改正して消防夫の任期を満五カ年とし、町内を一〇区に分け、一区ごとに二人の小頭を選任し、その上に組長をおいていた。

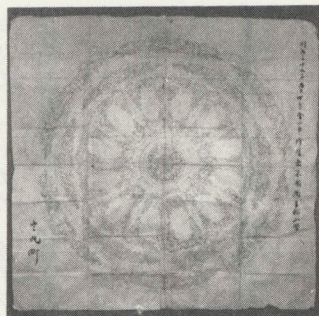


千枚分銅山 大正11年頃  
明治39年(1906)新調後、逐次  
装飾が施こされていった。

の二月には憲法が發布され、翌二十三年（一八九〇）には第一回衆議院議員選挙が行われて帝国議会が発足する。

当時の有権者は直接国税一五円以上を納める二五才以上の男子に限られ、有権者の数はきわめて少数であった。第二回総選挙は明治二十五年（一八九二）二月に行われたが、当時の内務大臣品川弥二郎は警察権力による選挙大干渉を民党候補者に加えた。砺波郡では改進黨の島田孝之が吏党の暴漢に襲われて負傷

## 二 庵屋台の整備



唐子山の車金具下図

「明治39年(1906)丙午4月曳山車修繕  
出来図面、金輪入替」と書かれてある。

明治二十一年(一八八八)十一月十九日、出丸町に一九戸を焼失する火事があったが、何といっても明治三十一年(一八九八)四月一日の大火は、城端町民に打撃を与えた。この日は井波町にも火事があり、城端の消防組は応援に出動して不在であった。午後三時四〇分野下町笹田藤一郎方より出火し、折からの強い南風にあおられ、午後一〇時三〇分ようやく鎮火した。焼失家屋二八二戸、三二四棟という大火であった。この時に大工町の曳山・庵屋台も焼失した。

明治三十三年(一九〇〇)にも火災が発生した。一〇月一九日午前十一時頃、西上町林源之助方より出火し、六〇余戸を類焼し午後三時に鎮火した。その後消防組では組織を拡充し、五〇名の組員を一〇〇名に、三名の小頭を六名に増員し、三部制として各部に腕力ポンプ一台宛を備え付けた。

その間、九代荒木文平(一八四九―一九一一)が明治二十九年(一八九六)県会議員に当選、引続いて三六年(一九〇三)までこれをつとめている。日露戦争が勃発したのは、明治三十七年(一九〇四)である。

## 絹業の近代化

明治初期の絹屋の組織は、一〇カ町よりそれぞれ絹屋総代一名を選出していたが、明治一五年(一八八二)吉村常道等が組合をつくり品質の向上につとめた。その後、明治二五年(一八九二)町長に就任した斉藤龍二



郎は荒町に城端生絹組を設立した。それは新しい行政権のもとでの絹業者に対する統制であった。

齊藤龍二郎は旧藩時代の御蔵役人の出身で、城端在住の数少ない士族の一人であった。町長・消防組長・生絹組長を兼ねて権勢を振ったので絹仲人の木村栄蔵らの青年層はこれに反発し、また町会とも対立した。そのような中で次第に青壮年層の信望を集めたのが岡部長左衛門であった。

岡部家は五箇山相手の判方商のほか、肥料商、米の廻漕業も営んでいた。明治二五年、二六才で町会議員に推され、翌二六年（一八九三）絹問屋・仲人の支持をうけて、生絹組を再編成し、組長に就任した。

生絹組では織物の規格を統一し、二名の検査員を配置して検査制度を確立した。製品を上・中・下の三段階に区分し、品質の向上を図るとともに、織工賃を規定し、増加する雇傭労働問題に対処した。しかしこの改革に反対の者もあり、生絹組に加わらず城端物産合資会社を設立した。

城端に銀行が創設されたのも明治二六年であった。荒本文平を頭取とし、野村理兵衛・篠井万三郎らの共同出資により、株式会社砺波銀行が設立され、翌二七年（一八九四）一月より開業した。また高岡銀行が城端営業所を設けたのも明治二六年であった。

日清戦争を経て、明治二八年（一八九五）井波に、二九年（一八九六）福野に、砺波銀行では出張所を設けた。また明治三〇年（一八九七）には、野村理兵衛が新たに合名会社野村貯蓄銀行（のち野村銀行と改名）を設立した。

明治三〇年一〇月に中越鉄道株式会社の城端駅が開業し、城端にも汽車が開通することになった。

城端の絹織物業に新しい技術がとりいれられたのも、その頃のことだと伝えられる。それは従来の斜め立機

具の“チンカラ機”に対して、バツタン装置を高機にとりつけた“カチャカチャ機”が導入されたことである。バツタン（飛梭機）は、一七三三年イギリスのジョン・ケイの発明したものであるが、日本への輸入は明治六年（一八七三）、京都の佐倉常七・井上伊平らがフランスのリヨンからたずさえ帰ったのが最初だといわれる。この技術の吸収は、バツタン装置を高機にとりつけることにより成功した。

北陸地方へは明治九～一〇年（一八七六～七七）に福井・金沢へもたらされ、明治一〇年代の試験期を経て、一〇年代末から二〇年代にかけて実用化の軌道にのっている。城端へのバツタン移入は日清戦争直後の頃で、明治三〇年代には“機大工”によるバツタン模造がすすめられ、次第に普及していった。

バツタン機で織られた絹は、“改良絹”または“節生絹”といわれ、一疋六〇～七〇匁の製品である。バツタンの使用によって、一疋を一日から一日半で織ることが普通となり、チンカラ機にくらべて一躍二倍の生産が可能になった。経糸は五箇山産の単繰、緯糸は福光・八尾・福島県保原などの玉繭糸が用いられ、大部分はこれまで通り仲人の手を経て購入したが、遠地産の原料糸が用いられるようになって、織屋に対する原料糸供給者として仲人の支配力が強くなっていった。

生産の準備工程は、繰返し・整経・経通し（統通し・箴通し）・機掛けとなった。織布工程は、バツタンの使用によって、杼の運動が一本の引縄をひくことで通緯することになり、道具器としての本質は変わらないけれども、手工的技術の制約を前進させた。また準備工程でも、繰返しでは従来の手繰器から、石のおもりを上下させることによって一二、三本のゴコが一度に繰れる操作機が用いられるようになった。また管巻きでも、従来の太鼓巻きからガンガラ巻き器へと、道具が改良され大量生産ができるようになった。





千枚分銅山の彫刻箱書

明治三十五年（一九〇二）九月、町役場（現在の城端別院の同朋研修道場）二階に共同販売所が設立された。これまでの仲人が問屋で商談する方法から、仲人が織屋から集めて持ち寄る製品を問屋が入札する方法へと変わった。この当時の町長が岡部長左衛門であった。

しかし、明治三十四年（一九〇一）から三十六年（一九〇三）にかけては、不景気が続いた。

### 明治中期の文化と生活

明治十九年（一八八六）の小学校令の公布によって、城端では四年制の尋常小学校と三年制の簡易小学校が設置された。明治二十三年（一八九〇）に教育勅語が発せられ、その後明治三〇年（一八九七）にかけて、元旦の新年祝賀式、二月一日の紀元節、十一月三日の天長節の制度化、御真影の下賜等、明治の国民教育が普及する。また明治三十二年（一八九九）には役場庁舎が小学校に充用され、役場は善徳寺詰所へ移転した。

城端別院善徳寺では、明治二十一年（一八八八）に経蔵の上棟式を行った。棟梁番匠は藤田長五郎（能登の人）、脇棟梁は三代目山村十右衛門・浅野喜平であった。その頃、婦人信者の集いである尼講の活動も活発で、経蔵建立の際には労力奉仕や屋上の金の擬宝珠の寄進も行った。

明治二十三年に東本願寺法主嚴如の布教伝道推進の下達をうけてから、城端別院は「御代様巡回」を実施して、布教活動の拡

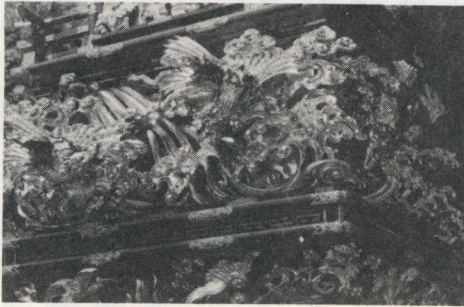
大と別院運営の充実を図った。また明治二十九年（一八九六）からは、「御虫干」を執行することになった。毎年七月二二日より二八日まで、宝物の虫干・展観と「夏の御文」拝読の行事を催し、善徳寺の「虫干法会」として加越能三カ国から多数の信徒が集まり、井波瑞泉寺の太子伝会とともに富山県浄土真宗の代表的行事となっている。

日清戦争が終わり、絹織物生産にバツタン機が導入され、鉄道も開通して、城端の産業・文化も発展の糸口をつかんだかにみえた明治三〇年代は、三一年（一九九八）、三三年（一九〇〇）と大火が続いて、思いがけない打撃を受け諸事緊縮のムードも生まれた。

それまでの城端町民には、正月の歳徳（さいとく）、二月のつごもり大市、五月の曳山祭、七月の七夕祭、一〇月の小祭（こまつり）（地藏祭）と、生活に結びついた年中行事が継承されていた。

七夕祭には各町内の子供達が、大きな葉竹に数十の紅提灯や短冊をつらし、歌をうたって町中をねり廻った。それがその後各町の競争となり、二間（約四メートル）もある大行燈（おほなとよ）をかがけて氣勢をあげ、なかば大人の行事に移行した。その頃東新田町に山田金次郎が住んでおり、行燈絵の妙手であった。しかし明治三二年の大火を境として、盛大であった七夕祭も衰微した。また一〇月の小祭も、それまでは各町ごとに祭の日も異っており、

三日は東上町の愛宕祭（あたご）、六日は新町・七日は東新田町・八日は野下町の地



鶴舞山の彫刻

上壇「水波に蚊龍」。下壇「水波に鶴」。  
明治45年(1912)大島五雲作。



蔵祭、東下町の黒大黒祭は九日、そして一〇日は大工町・一日は出丸町・一四日は西新田町の地藏祭、西下町の稲荷社市姫祭は一七日、西上町の恵比須祭は二〇日、二一日は川島の八幡社祭と地藏祭であった。この小祭は「子供祭」とも称されて親戚は互いに子供達を招きあつたが、明治三一年の大火の後には万事儉約ということで、一七日の稲荷祭、二〇日の恵比須祭を除いては、一〇月五日に総祭として各町同日に行うようになった。「つごもり大市」は、五箇山の人が町の取引先へ年賀の挨拶に来て一泊する二月末日に開かれた。御坊町・西町通りには露天の店が並び、東町通りには蕨・縄・ふかぐつ等の薬工品の市が立てられた。その当時は、平常でも四の日と十の日に朝市が立って、ささやかながら取引が行われ、盆の十日は特に入出が多かった。

明治四〇年（一九〇七）六月五日、風雨の日、民俗学者柳田国男が城端の町を通った。

『城端は機の声の町なり。寺々は本堂の扉を開き聴聞の男女傘を連らね、市に立ちて甘藷の苗を売る者多し。麻の暖簾京めきたり。』と、その紀行文「木曾より五箇山へ」の中に記している。明治四一年（一九〇八）における城端の機業戸数は四一九、製絹額六万六五二〇疋、その価格は一九万九五六〇余円であつた。

### 庵屋台の整備

明治二〇年代から三〇年代にかけては、各町で庵屋台の修復や新調、曳山・傘鉾の修理が盛んである。特に庵屋台の整備に力が入られた。

東上町では文政・天保年間に庵屋台の大改修を行ったが、明治二一年（一八八八）にも修理している。この年大工町では庵屋台の水引幕を新調。翌二二年（一八八九）には西下町の庵屋台が新しく作り替えられた。数



鶴舞山の車の金具

「高岡市金具師山内吉平造之」の銘が刻まれている。

寄屋造の二階建、主屋・離れ二棟の料亭を模した庵で、企画・設計は三代目山村十右衛門、素地工匠は中田清蔵、塗りも施して完成した。

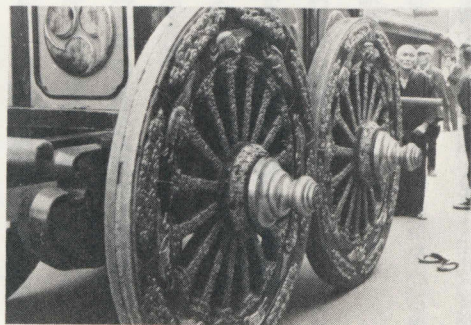
しかし翌二三年（一八九〇）は米価が騰貴し、曳山は出さないことに決定したが、若連中は町内で寄付を集め、庵屋台だけは巡回した。

当時の曳山祭の運営方式を明治二十四年（一八九一）の記録で見ると、氏子惣代から県知事宛に祭礼執行の願書を提出し、城端の警察分署長がこれを許可するという手続きがとられている。期間は五月一日から一七日までとし、その間、各町内路上建旗、御旅小屋掛け、神輿渡御、獅子舞差出し、曳山・屋台が市中練廻しをすると届け

出ている。

当時の氏子総代は五名で、篠井万三郎・荒木文平・松本才喜・伊藤虎一郎・大岡小兵衛の旦那方で、その後野村理兵衛・布崎新右衛門らと交替している。

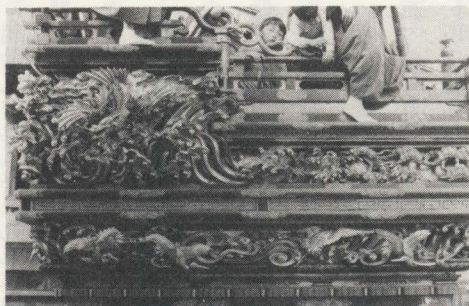
五月一四日の各町内路上の建旗は、神を迎える氏子町民の信仰のあらわれで、大正初期までこの仕来りは守られていた。この祭礼の旗は流れ旗で、城端・今石動以外の他の町村では幟旗（のぼり）しか許されていなかった。旗の長さ



鶴舞山の大八車

明治40年(1907)浅野辰次郎ほか居町大工の作。





鶴舞山の彫刻

上壇彫刻、前半松竹梅に鶴。後半水波に蚊龍。

下壇彫刻、水波に鶴。明治45年(1912)大島五雲作。

は六間半(約一三メートル)もある大きなもので、下方で切りわけられている。各町に一對ずつあり、町の能筆家が雅語を揮毫、落款している。西上町の旗には「著明莫大乎日月」と「崇高莫大乎富貴」、東上町のものには「富有之謂大業」と「日新之謂盛徳」とあり、両町ともに伊藤一曹の筆であった。また出丸町のもものは現在も保存されているが、「天地無私春又帰」、無事拱然知静勝」とあり、「明治三十六年卯五月、出丸町氏子谷口豊謹書」となっている。

神明宮の杜掌は、明治二六年(一八九三)から篠原乙三郎、明治三五年(一九〇二)から利波謙治が兼務し、明治四五年(一九一二)から篠原志乃美になっている。

出丸町では庵屋台修復のため寄付金を集めはじめ、明治三二年(一八九九)にこれを達成した。

明治二七年五月一日は、野下をまわり東下まで来た時大雨となり、ここで泊り山となったが、一六日は好天気で朝八時より曳き出し、東下を下り午後八時頃に新町へ着き、そこで提灯をともした。帰りは一七日の午前一時頃であった。随分新町の宿でゆっくりしていたものである。

明治二九年(一八九六)に、西上町では庵屋台と傘鉾を修理しているし、西下町では曳山の屋根を改修している。この年、現在の西下町公民館の地に警察分署の独立庁舎が建設されたが、七月五日の竣工式に各町は庵屋台を出して祝意を表した。

明治三〇年（一八九三）、中越鉄道が城端へ開通することになった。そこで曳山祭もそれが完成する秋まで延期することにした。ところが秋になるとウシカが発生して大凶作となり、小作料も全免するほどの大害をうけた。そのため曳山祭も中止し、人形飾りのみのさみしい祭となった。

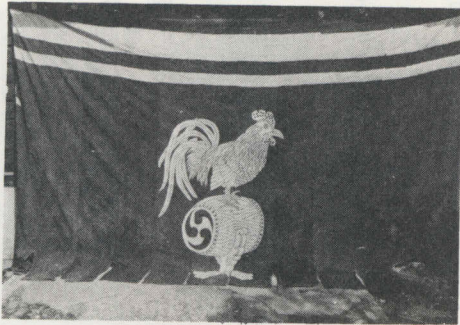
明治三一年（一八九八）四月一五日は、明治の城端人にとって永遠に忘れることのできない日であった。この日の大火によって、大工町では曳山も庵屋台も焼失してしまった。関羽と周倉の御面像および装束その他が難をまぬがれたのは不幸中の幸いであった。翌月の曳山祭はもちろん中止、焼け跡に復興の槌音もいまだしの街を神輿のみが巡行した。

明治三二年（一八九九）、大工町では人形の胴を新調して人形飾りのみは行った。この年、東下町では大黒天の装束を新調しているが、一五日は西下町で大雨にあい、午後三時に帰町、一六日も正午より雨となり、曳山は横町までで各町へ引取った。

明治三三年（一九〇〇）、東上町では曳山の地山幕と傘鉾を新調した。また大工町では現在の秋葉神社の向いに山蔵（収蔵庫）を建てた。

この年の一〇月一九日、またしても西上町に大火があった。翌三四年（一九〇一）は前年の火事と不景気な年でもあったので、曳山の中止を決定したが、若連中から要望があり、曳山を出すことにした。

明治三五年（一九〇二）五月一五日は朝から天候が悪く、曳山は出した



諫鼓山の古い地山幕  
諫鼓鶏文様が染められている。



が午後二時より暴風雨となり、出丸町より曳山・庵とも各町へ引揚げた。翌日も雨で、結局一七日午後一時谷口豊平前に集まり、西下町上りにて各町を廻り帰町した。当日は町内人足でひきまわし、東下町では出れない者から二〇銭宛徴集した。なお当時の人夫賃は三五銭である。

明治三六年（一九〇三）、東上町では庵の天井を修理、西上町は山蔵を再建するために地ならしを行った。この年の祭に、中越鉄道は汽車賃を割引してサービスしたが、不景気な年であった。

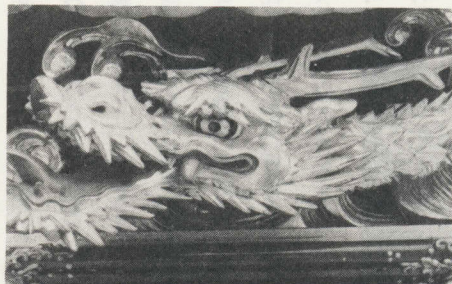
明治三七年（一九〇四）二月に日露戦争が始まり、この年は飾り山だけで曳き山は中止。翌三八年（一九〇五）は、バルチック艦隊北上の国難をむかえ、神輿巡行も取止め、曳き山ももちろん中止した。

### 三、曳山の改装

#### 明治末期から大正へ

明治三八年（一九〇五）九月五日ポーツマスで講和条約が成立し、翌三九年（一九〇六）応召兵士は相次いで帰郷したが、帰らぬ英霊も多かった。現在の城端中学校一帯の地に、陸軍の立野ヶ原<sup>しやのがはら</sup>廠舎が出来たのも明治三九年である。

明治三九年（一八九六）に金沢の第九師団が新設され、その演習場として立野ヶ原一帯が明治三二年（一八九九）から買収された。しかしまだ廠



千枚分銅山の下壇彫刻(正面)  
水波に龍の彫りもの。玉眼嵌入。  
明治40年(1907)大島五作造。



舎の施設がなかった。そのため民家に宿営することとなり、師団においても甚だ不便であった。そこで明治三十六年（一九〇三）、当時の町長大岡小兵衛以下町の有志は陸軍大臣に上申して、廠舎の建設敷地を献納することを願ひ出た。廠舎が出来ると、演習地までの軍用道路が敷設され、山田川には城南橋が架設され、陸軍橋とも称された。

明治三十九年二月より大正二年（一九一三）二月にいたる七年間、再び岡部長左衛門が町長に就任、その間、明治四〇年から四年間は県会議員にも選出されている。そして、産業経済の近代化、教育・文化の振興、消防機能の充実に尽力したということで、大正二年三月全国優良町村として内務大臣の表彰を受けた。また同年一〇月にも町の商工業施策が認められて農商務大臣の表彰も受け、城端町は名実共に内外に輝く時代であった。城端神明社敬神会の発足、城端織物組合の設立、水月公園や私立城端病院の設置、柴田弥一郎の海軍兵学校への入学と卒業などもその間のことである。

しかしいっぽう、岡部町長独裁への反発もあり、大正二年八月、織物組合長の改選に際して遂に組合長の職を退くとともに、その後町長をも辞任した。

明治四〇年（一九〇七）、従来の在郷軍人同志会（明治二四年頃設立）が城端在郷軍人団と改称した。

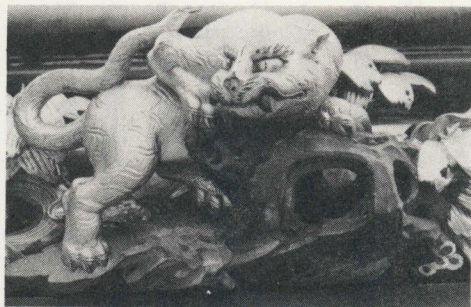
明治四〇年（一九〇七）に小学校令が改正され、義務教育が六カ年に延長されたが、城端では大正四年（一九一五）伊藤巳之助（一八六九—一九三六）が町長に就任、大正六年（一九一七）四月二六日、現在の総合庁舎の敷地に小学校の新校舎を建設した。その年はまた、陸軍大将閑院宮載仁親王殿下が、立野ヶ原演習場へ特命検閲使として来臨、野村理兵衛邸に一泊された。

宮岡幸次郎が県会議員に当選したのは大正四年（一九一五）。その頃、第一次世界大戦の影響で経済界は未曾有の活況を示したが、その反面物価が騰貴し、大正七年には魚津町に端を発した米騒動が全国に波及し、大きな社会問題となった。

### 城端の産業革命

城端へ羽二重と紵の製織が導入されたのは明治三十九年（一九〇六）、藤田治作・吉村甚右衛門らが、新潟県五泉より佐々木兼助技師を招いて伝習したことに始まる。その後、羽二重・紵製造の機屋が急速に増加し、明治四二年（一九〇九）、岡部長左衛門を組長として城端織物組合が設立された。

京羽二重は幅九寸八分、長さ六丈四尺、目方は二〇〇匁、二五〇匁、三〇〇匁、三五〇匁とあって、紋付羽織・着物の表地となる製品である。原料は群馬・福島・長野県産の生糸で、金沢の糸問屋より購入した。生産工程は、経糸は繰返し・糊付・整経・通し（統統・箴）・機掛け、緯糸は繰返し・合糸（二本、三本、四本）・管巻きの準備工程をへて織ることになる。織機は羽二重の重みに耐えうる木製のバツタン高機で、漸次金属統統・金属箴も用いられるようになった。各業者は四、五台から一〇台内外の織機を設置し、工員も一〇余名の規模のものが多かった。いわば城端の羽二重マニユファクチュアが成立したのである。城端織物組合規約によると、組合員は内地向羽二重および紵の製造業者で構成し、製品を共同乾燥場で処理し、検査を実施して量目を記入



千枚分銅山の上壇彫刻(正面)  
岩に虎の彫りもの。明治40年(1907)大島五作造。





竹田山

戦前撮影したものであるが、安永の原作をまもっているため形態・装飾は現在とかわらない。

することになっている。製品は主に京都・名古屋の市場へ出荷された。

組は夏物用として一月から五月の季節に製織した。大正の初め頃からは、群馬桐生より技術者を招いて紋織物も始められた。これはジャカードを使用して織るものである。また藤田機業場では京都府の丹後より技師を招き、水車で操作する八丁撚糸機を設置して縮緬・壁織・漣織などの製織を始め、その後各

機業場でも織り始めるようになった。

城端への力織機導入は、明治四十三年（一九一〇）絹問屋であった笹井作兵衛が石油発動機で操作する齊外式力織機二〇台を金沢より購入し、サイマル工場を設立したことに始まる。その後、大正に入って電気が導入されたことにより、電動力使用の津田米式・津田駒式・重田式・松山式・永野式などの力織機が、大正六年から七年にかけて移入され、大正九年（一九二〇）の統計によると、工場数二一（内、力織機工場一六）、力織機四二〇台となり、城端絹織物業の産業革命が達成された。従業員数も男一〇九、女四七五、計五八四人となっている。

その間、企業の法人化がすすめられ、大正七年（一九一八）に四つの株式会社設立された。（絹）城端機業、

①越中絹織、②城東機業、③城端織物がそれである。この年城端の金融界では砺波銀行と野村銀行が合併し、砺波銀行と称するようになった。



城端織物業の生産高

	生産高(単位、疋)
明治38(1905)	47,065
39(1906)	58,933
40(1907)	53,251
41(1908)	66,520
42(1909)	68,920
43(1910)	66,817
44(1911)	78,133
大正 1(1912)	79,855
2(1913)	78,622
3(1914)	63,080
4(1915)	63,568
5(1916)	67,191
6(1917)	80,793
7(1918)	101,129
8(1919)	130,870
9(1920)	107,433
10(1921)	153,506
11(1922)	111,819
12(1923)	102,701
13(1924)	121,729
14(1925)	104,984
昭和 1(1926)	106,675

第一次大戦中の好景気は、城端の産業革命を達成させたが、大正九年（一九二〇）日本経済は戦後恐慌に直面した。しかし城端では大戦景気に刺激されて、戦後の不況が見通せず、一〇年（一九二一）、一一年（一九二二）と工場数が増加し、三六工場となったが、新設のものは主に従業員一〇人以下の小規模工場であった。大正一二年（一九二三）の関東大震災は経済不況に追い打ちをかけた。城端でも次第に不況の深刻さを痛感し、工場数も減少しはじめ、大正末年（一九二六）には二六工場となった。また、第一次大戦後、新しいイタリヤ式撚糸機が桐生の製作所から、次いで東京の菅製作所から移入されて、チェニーの製織が始まっている。

五箇山の養蚕と製糸は、明治中期に機械化が普及して活況を呈したが、大正初期より足踏織機、カチャカチャ機が取入れられ、地元産の単繰を経糸に、城端から運ぶ豊橋産の玉繭糸を緯糸として節生絹の生産が普及した。

## 城端の近代文化

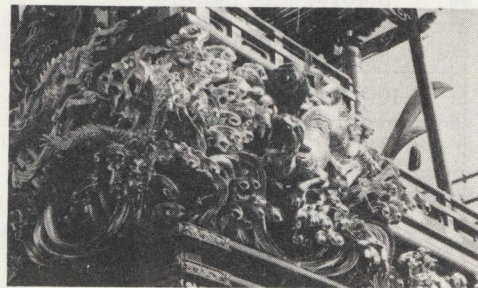
柳田国男が耳にした「機の声」は、明治四〇年（一九〇七）、カチャカチャ機の全盛期で、飛杼の通緯する音であった。しかし間もなく力織機が導入され、城端に産業革命が開始されると、次第にカチャカチャの機音は、家々から消えうせて、工場制機械工業の時代を迎えることになった。あたかも大正デモクラシーの風潮が、ジャーナリズムによって地方へも浸透しはじめる頃であった。

刊行物では、すでに「中越評論」、「城端時評」が明治四〇年頃に刊行されたが、短期間で廃刊していた。

そうした中で大正七年（一九一八）四月、「城端時報」の前身である「城端商工時報」が発刊された。商工業の発展に寄与するのが主目的であったが、町政一般の批判も忘れなかった。このあとをうけて大正一三年（一九二四）二月から「城端時報」が発刊され、大正一五年（一九二六）五月、城端別院住職成満院排斥問題に端を発した町政上の大波瀾に対処した。

城端別院では、先に逝去した第一八世住職宝香院勝道の長女宝樹院貞子姫（一八九〇―一九一四）が、城端婦人景仰の的として信望があり、尼講の活動が活発であった。貞子姫の配偶が第一九世住職成満院で、その復職をめぐる擁護派と排斥派とが大衝突した。いわゆる別院騒動がこれである。

大正五年（一九一六）から善徳寺盤持講によって始められた加越能盤持大会は、東の大関を三年続けた者を



千枚分銅山の上壇彫刻(後半)  
水波に龍虎の彫りもの。  
大正12年(1923)大島五雲作。



横綱として台所門に掲額した。

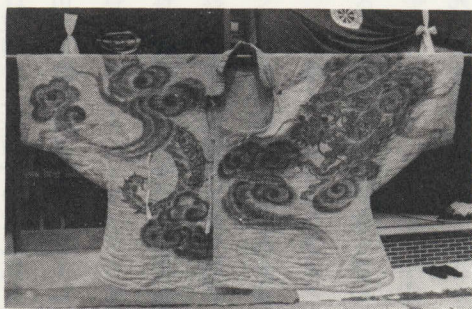
大正四年（一九一五）、織物組合が天満宮書道奨励会を作り、小学生の競書大会を始めた。また、“筏スキー”が城端でうぶ声をあげた。城端小学校訓導中川孝久・高桑龍治が考案したもので、すす竹を針金で組み合わせ筏型のスキーを製作したのである。そして大正七年（一九一八）には筏スキークラブも組織された。金田スキー製作所などで木製スキーの製造を始めたのが昭和二年（一九二七）である。

明治四五年（一九一二）に組織された済美青年会が大正五年（一九一六）城端青年会と改称され、さらに大正九年（一九二〇）四月青年会幹部の発起で班員一一五名からなる城端救護班が組織されている。

城端へ電話が導入され、その交換事務が開始されたのは明治四三年（一九一〇）一〇月からのことである。

大正一一年（一九二二）町役場（現在の郵便局の敷地）の階上に“城端町立平和記念図書館”が設立された。また大正一三年（一九二四）四月には別院詰所を借りて町立幼児託児所が開設された。

二代目治五右衛門の小原白晁（一八六八～一九一八）は、明治二〇年代から三〇年代にかけて、その作品を内外の展覧会に出品、のち金沢へ転居。その没後は一時城端時絵は中絶状態となったが、門弟の岡田雪城（一八九三～一九三八）は大正一三年、農商務省主催の展覧会で褒賞をうけ、政府買上品となりフランスの博覧会に陳列された。



関羽像の古い装束  
勇壮な雲龍が画いてある。下着として用いていた。



城端の文芸面での近代化は、自由律俳句の導入によって開花した。これよりさき明治四四年（一九一一）富田溪仙が野村満花城をたずねて来町、翌四五年（一九一二）河東碧梧桐が飛驒越えに城端を訪れ、大正年間には荻原井泉水や中塚一碧楼も城端へやってきた。特に一碧楼はその後も屢々来町している。一碧楼の来町を機に野村満花城（一八八八―一九六八）田島城月（一八九五―一九三八）宮岡珠鏑楼（一八九三―一九六〇）らによって「地獄谷」が発刊されたのは大正一四年（一九二五）のことである。大正一五年の五月祭に来町して、一碧楼は次のような作品を残している。

曇りつ暮れる祭の日の人々にまじり

祭見に来しとなく逢いにきしかな

大正一四年、この年日本青年館開館式に五箇山の麦屋節踊が出演したことに刺激されて、むぎや節新声会が発足した。谷聴泉（一八九八―一九三九）の「大牧温泉」が第六回帝展に入選したのもこの年、そして翌年は「故郷の家」が第七回帝展に入選した。

## 曳山の改装

明治三一年（一八九八）の大火以来、再度の火災、経済の不況、日露戦争の勃発等で低迷を続けていた曳山祭は、明治三九年（一九〇六）大工町の新しい曳山も出来て、久し振りに賑やかな祭となった。中越鉄道では汽車賃を二割引にしてサービスした。

翌四〇年（一九〇七）城端神明社は神饌幣帛料供進神社に指定され、神輿も修繕し、祭礼振興のために、城

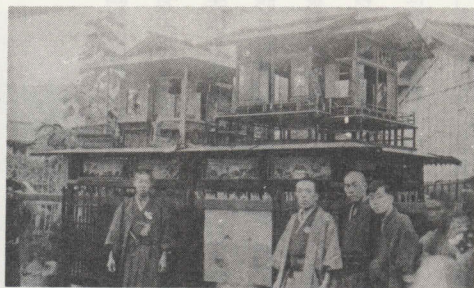
端神明社敬神会“を発足させた。従来五名であった氏子総代を一〇名に増加し、等級制の会員組織が成立した。三等以上の高級敬神会員の醸金によって神輿渡御の諸経費を負担する仕組みであった。敬神会長には町長が就任し、氏子総代が輪番で神輿の御昼宿を引受け、御昼宿は渡御行列の供奉者に昼食を饗応する仕来りであった。

この年、水月庵で天満宮の千年祭が執行され、各町は傘鉾を捧持して祝意を表わした。

日露戦争の終結から大正末にいたる約二〇年間は、各町で曳山の改装競争が行われ、いわゆる「豪華絢爛」たる近代の曳山祭が確立した時期である。

大工町では新調した曳山を、井波彫刻と城端塗で次第に装飾していった。明治三十九年（一九〇六）に「須佐之男命大蛇退治の図」の後屏彫刻を大工連中が寄進、明治四〇年（一九〇七）に現在の前部の虎の彫刻を岡部達一郎が寄進、大正一一年（一九二二）に後屏の彩色を塗師連中が寄進、翌一二年に両腰と後部に「波濤と竜虎」の大彫を佐相義一郎・細川徳太郎・松嶋栄作が寄進して取付けた。その間、大正七年（一九一八）に山蔵を坡場<sup>は</sup>の現在地に移転し、屋根を解体するだけで曳山を格納できるようにした。

出丸町では、明治三十九年（一九〇六）に車を新調して金輪を入れ、翌年これを塗装、四二年（一九〇九）には豪華な金具二二枚を取付けた。明治四五年（一九一二）に「司馬温公」の後屏を作り、大正五年（一九一六）



西上町の古い屋台  
小原治五右衛門作。大正6年(1917)出町(砺波市)へ売却したが、昭和50年12月再び城端町に戻った。



には曳山の大型改造に着手、翌六年には「唐子」の彫刻・「水波に鷺」の彫刻を付け、さらに大正一〇年（一九二一）には、これに塗箔・彩色した。

大正五年、出丸町の坂をなだらかな勾配に掘下げたため、曳山のひき違いが不可能だということで、従来の行列の進入を三台ずつの進入に変えようとしたところ、出丸町が納得せず、午後四時頃になってもまとまらず、警察署長の裁断でこの年限り

三台入れ替わりということとで解決した。また川原町へは急坂になったため、旧例を破り庵屋台をおろさぬことになった。



諫鼓山の車  
明治45年(1912)改作。



千枚分銅山 明治40年頃  
明治39年(1906)新調したこの山に最初に取り付けた装飾が下壇の「水波に龍」の彫刻である。当時はまだ全面白木であった。

東上町では、明治四〇年（一九〇七）に城端一の大きな大八車を新調、鶴舞模様の金具を付け、曳山も大型に改造して塗漆した。また明治四五年（一九一二）には「波に飛龍」の腰彫と二重構造の屋根を作り、大正一〇年（一九二一）に腰彫の塗装と地山の巴紋額を新調、大正一三年（一九二四）に四本柱を塗り替え、車の金輪を入れ替え、大正一五年（一九二六）には紅葉に鹿をあしらった飾り金具を地山に取付けた。西下町でも明治四〇年頃に新しい車をつくり、四一年（一九〇八）に屋根を、四五年（一九一二）には車を塗上げ、曳山上

段の勾欄と「竹に鶏」の後屏彫刻、大正六年（一九一七）に腰を高く改造して「石橋に唐獅子」の彫刻、大正一五年（一九二六）には長押に金具を取付けた。

東下町では、大正九年（一九二〇）に新しい車を取付け、大正一四年には金具や塗も仕上った。従来の車は直径一二〇センチであったが新しい車は一四二センチの豪華なものになった。すでに大正四年（一九一五）に地山の柱を一〇本取り替え、腰廻りは金糸で刺繍した打出小槌と宝珠をあしらった鮮やかな横幕で飾り、翌年には上段に大彫「雲に鳳凰」、下段に「唐子人形」の彫刻を取付けて、曳山を大型化・装飾化していたのである。

これまで曳山の後屏は、東上町と東下町にのみ取付けられていたのが、大工町・出丸町・西下町にも付けられた。また腰廻りにも彫刻が取付けられ、金箔・彩色を施して豪華で絢爛たる近代曳山が完成されたのである。

西上町では、明治四二年（一九〇九）に山藏を新築、翌四三年（一九一〇）と大正四年（一九一五）に曳山を修繕、曳山の装飾化と大型化の流行に追従しようとして「水浪」彫刻の後屏を作った。ところが新調した後屏を取付け、曳山を改造すると、調和のとれた曳山の構造美を害するという観点から、ついに後屏の取付けを断念した。そのため西上町の曳山は、装飾は少ないが、瀟洒で優美な「安永調」の作風の原型を今日に伝える貴重な存在となった。大正一一年（一九二二）には、車を原形の寸法通りに新調、豪華な金具を取付けて装飾した。



唐子山の上壇彫刻(向って右側)  
唐子遊びの彫りもの。大正六年大島五作造。





諫鼓山の堆黒と紫檀彫刻

大工町では庵屋台の復元を明治四一年（一九〇八）に行い、ありはのなかひら在原業平の別荘に模して原形通りに新調した。翌四二年、西上町・東下町の庵も修理、四四年には出丸町の庵の重、東上町庵屋台の紫地に波と鶴の模様の水引幕が新調された。

西上町では曳山の改装を中止したが、庵は新しく豪華に造り替えることに決定し、大正四年（一九一五）から五年にかけて大型構造の庵屋台を新調した。

庵への欄間のはめ込みは、すでに出丸町が明治三二年（一八九九）に取り入れていたが、大正五年（一九一六）に西下町、大正一〇年（一九二二）に東上町、翌一一年（一九二二）はさらに西上町が東海道宿場のうち一二カ所の彫刻欄間を新調し、各町の競争となった。大工町の庵には、書院の丸窓に明治三〇年（一八九七）彫刻を入れたが、庵廻りは鴛鴦・杜若などのつくり物で、明治四一年の庵新調の時に神戸市の佐相義一郎が寄付した。

曳山の腰廻り彫刻、庵屋台の欄間彫刻は、多くが井波町の大島五雲（五作）の作で、田村与八郎・松永正行・岩倉理八・加茂辰藏・横山作太郎らの作品もある。また、曳山・庵屋台の新調・改造は、三代目山村十右衛門・中田清藏・米原清一郎・浅野辰次郎・浅野喜平・浅野利吉郎らの城端大工、岡部宇右衛門・竹林嘉一（鶴南）らの城端塗師一同が担当した。異色なものとしては、大工町曳山の岩の彫刻の彩色を谷聴泉が施している。

大正年間、各家庭に電燈が導入されると、宵祭の人形飾りも華麗なものになってきた。山番の家では豪華な座敷屏風をめぐらして飾り立てた。谷聴泉が生家のために描いた「唐獅子屏風」は、その風潮を象徴するものである。

その間、各町で人形装束も新調されている。出丸町は明治四二年（一九〇九）、梯子渡人形と唐子笛吹人形の衣裳を作り、久しく中絶していた操り人形を復活した。また大正一三年（一九二四）に西下町では増山善蔵が堯王像の装束を寄付した。

目でみる祭の豪壮化に続いて、耳できく祭の充実もすすめられた。

荒木友吉（一八八〇～一九三八）を中心として各町の若連中が庵囃子の技芸向上に努め、三味線や笛の上手が相次いであらわれた。荒木友吉は三味線・唄・笛のいずれにもすぐれ、笛の名手に和田安之助（一八七四～一九四四）、浜田文蔵（一八八六～一九六七）、唄では田尻五郎（一八七六～一九三七）、笛田外次（一八八九～一九六八）などがあげられる。また庵唄は主に端唄であるが、伝来の江戸端唄のほかに、有川土豊・洲崎淇石（一八六〇～一九二七）、野村満花城（一八八八～一九六八）、田島城月（一八九五～一九三八）、洲崎天辻（一八九〇～一九六三）などが替唄を作った。

京や江戸の青楼、数寄屋造や別荘造を模した優美な庵の下に、格子造や縮緬幕の水引をめぐらして、優雅な庵唄の囃子と唄が流れてくると、曳山車の軋りの音に重なりあつて、曳山才許の打つ拍子木の音もきこえてくる。夜になると提灯のあかりが映えて、いっそうの風情が醸しだされる。

城端の曳山・庵屋台がこのように豪華絢爛・華麗優雅な美術・芸能の風流として、祭礼を彩るものとなった



背景には、江戸時代以来の伝統工芸の充実、江戸・上方の町人芸能の地方普及、明治以降の生活規制の撤廃、経済力の向上などがあげられる。

藩政時代の封建的諸制約によって十分開花しきれなかった曳山祭が、明治から大正へと、まさに春爛漫と咲き乱れる爛熟期をむかえたのであった。